

---

# 俺、元ヒーローっす。

仙崎 龍牙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺、元ヒーローっす。

### 【Nコード】

N4844T

### 【作者名】

仙崎 龍牙

### 【あらすじ】

これはあつたかもしれない未来

ヒーローはアイドルのように毎日お茶の間にぎやかす存在になつてた

数年前、突然現れた人間を改造して作られた通称怪人を率いて世界征服を狙う数多くの悪の組織が突然現れた

各企業はそれに対抗して、強化服 通称スーツなどの武器を開発した  
それをまとって戦うものをヒーローと呼んだ

これはそんな時代の一人の元ヒーローの物語

## プロローグ

「キミ、今日でクビね」

朝一番にハゲの上司から突然告げられた言葉。これで15回目のクビ。うち一回は自主退職だから実質14回目かー。などというどうでもいいことが頭をよぎる

俺が反論をしようとしたら上司が俺の顔の前に人差し指を立ててこ  
ういった。

「文句も言い訳も聞きたくないからさっさと荷物まとめてくれないかなあ。ああ、これは退職金ね。今月分の給料と一緒にしておたから。そのダンボールの中はキミの私物ね」

そういつて俺にダンボールを投げつけ、机に薄っぺらい封筒を置い  
た

俺は封筒とダンボールを持ち、会社を後にした

## 無力な英雄（ヒーロー）

ダンボールを片手に通勤、通学ラッシュでにぎわっている大通りをフラフラと歩く

（次の仕事、どっかに転がってねえかな・・・）と思いながら公園のベンチにドカッと座り込む。目の前には迎えのバスを待っている幼稚園児がじゃれあっている。後ろのとおりには会社に遅れないように早足で歩いているサラリーマン

「俺、なにやってるんだろ・・・」

無意識のうちに昔、ヒーローのときに使っていた腕時計型変身道具ウオッチをいじっていた。

「なあ！ 昨日のアレ！ みたか!?!」

「みたみた！ レインボーレンジャーだろ!?! かつこよかったなあ!」

子供同士の無邪気な声が耳に届く。

（俺みたいな人間になるなよ）

心の中でつぶやいてベンチから立ち上がろうとしたと同時に後ろからビルが崩れる音がした。

そしてあちらこちらから悲鳴や血の匂い。

「誰か助けてくれ！ 悪の組織が攻めてきた！」

誰かが叫ぶ その声も悲鳴にかき消されていった

「誰か！ 誰かああ！」

「わああああああああ！」

俺の前をどンドン人が走り去っていく。

(俺もにげねえとな)

俺はダンボールをインドの人のように頭に乗つけて器用に人ごみを避けて走っていく。

逃げる集団の最前列を走っていく俺が目にしたもの それは絶対に思い出したくない光景だった。

人がカラスについはまれたゴミ袋のようにバラバラにされて転がっている そしてまだ形が残っている死体にたかって食らっている複数の黒い人型の化け物 悪の組織の一つ、プレデターの戦闘員であった。

俺は路地裏に逃げようとした。

「お母さん どこ〜？」

と言う子供の声を聞いて足を止めた。

(あーあ また俺の悪い癖が出ちゃったな)

俺はダンボールを投げ捨て走り出す。そして数秒後、背中に痛みが走った。

(俺、ヒーロー辞めたはずなのに何やってるんだろ・・・)

俺は心の中でぼやいた

俺は無意識のうちに目の前の子供を抱きしめて守っていた。

「坊主、悪いやつ倒したらすぐにお母さんを探してやる。それまであっちに隠れてろ。すぐにヒーローが助けに来てくれるぞ」

俺は満面の笑みで子供に話しかける。子供は素直に従い、俺の後ろの路地に逃げ、顔を少しだけ覗かせていた

「少しだけ、お仕事させてもらいますかな」

俺はウォッチの出っ張りを押し、右手を前に突き出した。

## 英雄（ヒーロー）復活

「変身っ！」

俺は叫びと共に突き出していた右腕を後ろに回し、左手を相手を殴るように突き出す。

ウォッチから光があふれ出し、俺の周りを包む。プレデターの戦闘員が危険を感じ俺に攻撃を仕掛けるがもう遅い。戦闘員が殴りかかったとき、すでに変身を終わっていた。

現役時代は企業の支援があつたからあつた装甲も、武器も、今はない。あるのは戦闘補助のAIとほんの少しの強化が施された己の肉体のみ。俺は黒い全身タイツのようなスーツを身にまといながら叫んだ

「正義のヒーロー　ただいま参上！　なんてね」

名乗りと同時に重心を下げ、戦闘員に突っ込む。　戦闘員は大口を開けて俺を喰らおうとする。

俺はそいつの横に回りこみ右ストレートを喰らわせ、戦闘員を吹っ飛ばす。

「お前らの行動なんて予想済みなんだよ！」

こっちに気がついたようで襲ってきたもう一体のほうに殴りかかりながら吠える

「おるあ！」

もう一体も壁に埋め込む

「警報 後方より敵」

AIの音が響く あわてて後ろを振り返ると先ほど埋め込んだ戦闘員がこつちへ向かって走ってくる

今度は口をあけず俺に拳を向ける

「おるあ！」

俺は両手を使い戦闘員と組み合わせる

「警報 後方より敵」

「嘘だろ！？」

叫ぶと同時に後頭部に痛みが走った

それが俺の最期の記憶だった

## 消された記憶（メモリー）

「ん……。」

目が覚めたと言うことは分かった。　だけど手と足を伸ばそうとしたら『何か』に拘束されていた。　まるで小さい頃に見たヒーローのアニメでヒーローが改造されるシーンのようだ。

辛うじて少しだけ動く上半身を動かし、全身の見える部分のみ確認する。　見える限り服は全部取られているが身体にヘンな機械や怪しげなベルトが付いていたり、人間ではない何かの手が付いていたりすることは無い。　まさか改造される前か？　イヤな想像をしてしまつて冷や汗が垂れる。

「おっと目が覚めたようだね。　調子はどうだい？」

部屋の隅から声が聞こえた。　俺は急いで声の聞こえた方に顔を向ける。

「これがいいように見えるか？」

「ああ　拘束が邪魔だったね。　改造が失敗して理性が飛んだ時の保険みたいなものだったからね。　普通にやり取りで来て暴れてない所を見ると成功したっばいね。」

男がしゃべり終えた後パチン　と指を鳴らした。　部屋の中に明かりが付き、両手両足の拘束が消える。　声のした方を見ると眼鏡をかけていて、殴ると折れてしまいそうなほど細い体をした男が白衣を着て立っていた。

「いつまでも裸だと見てるこっちも辛いから」

と言ってもう一つ持っていた白衣をこっちに投げる。それは他に  
着るものがないのでそれにそでを通した。

「じゃあこっちから質問するね。君の名前と職業を言ってみてよ。」

「俺の名前は……」

ここまで言っただけ違和感を感じる。名前が思い出せない？　そもそもなんで俺はここに居る？　目が覚める前は？　そもそも『俺』は『何』だ？

「その様子だと改造は成功したようだね。」

頭を抱えている俺をみて男は言った。

「とりあえず一般常識を除いた記憶を消去させてもらったよ。君は『素材』はよかったんだけど余計な感情とかあったからね。」

男はそこまで言っただけ一旦息を吸った。俺は固まったまま動けなかった。

「今日から君は僕達の『組織』で生きてもらうよ。名前はそうだな……『ロウ』と名乗ればいい。君の戦い方は狼そのものだからね。」

男はニコニコしながらそう言った。

「記憶をなくしたままっというのも可哀想だからね。頑張れば記憶を少しずつ戻してあげるよ。君の仕事を簡単に説明しよう。僕達が指示する場所を破壊してくれればいい。あと、僕の事は『博士』とでも呼んでくれていいよ。僕も君と同じ記憶を消された人間だからね。」

博士とかいう人間が予想外のカミングアウトをした。しかし俺に動く気力はなかった。

消された記憶（メモリー）（後書き）

しばらくはごっちの方を更新しようと思います。  
応援よろしくお  
願ひします。

## 鎧をまとう男（ロウ）

「そんな君に早速『仕事』だよ。」

博士が俺に向かってそう言う。そして指を鳴らして上からスクリーンを降ろす。

「今回君はこの建物を壊してくれればいい。」

そこにはひとつの立派なビル。何階あるのか数えるのもめんどくさいくらいでかい。

「君一人にやってもらおうわけではない。正確に言うくと破壊作業の妨害に来る敵の排除・・・でも言った方が分かりやすいかな？」

確かに俺一人でビルを破壊するのは不可能だ。

「俺以外にどのくらいの数が来る？」

「破壊作業は別の部隊がやるから僕は知らないね。僕の部隊からは君と戦闘員を5人くらい出すよ。今回のリーダーは君だ。」

博士はそう言ったあと俺に向かって何かを放る。俺はそれを慌ててキャッチした。何かと思って確認したらそれは普通のデジタルウォッチだった。その時計を見た瞬間一瞬頭が痛くなった気がした。

「それはパツと見、普通の腕時計だがそれは『ウォッチ』と呼ばれる道具だ。君の武器であり鎧になる。右上の出っ張りを押した

後、『変身!』と言ってみてくれ。」

俺は『ウォッチ』の右上の出っ張りを押す。そして言われたとおりに叫んでみる。

「変身!」

叫びを合図にして腕時計から黒い糸のようなものが噴き出し全身を包む。1〜2秒後 俺の身体の周りには黒い全身タイツのようなものが付いていた。耳元で音声がこっ告げた。

「マスター カクニン。 ナマエトセイベツヲイツテクダサイ。」

「言い忘れたけどAIの指示に従って。君をそのウォッチのマスターとして登録するから。登録が済んだら最適化されるからまた見た目変わるよ。」

俺は博士の言った通りに行動する。

「名前は『ロウ』 性別は男だ。」

「リョウカイ。 マスターロウ。 トウロクカンリョウ。 サイトキカ カイシ。」

音と同時に再び糸が溢れ出した。先ほどと違うところを上げるとしたら糸の色が銀色と言うところだ。

また1〜2秒したとき糸が収まる。身体を見渡すとさっきの全身タイツのようなものの上から中世の騎士が付けていそうな胴当てとガントレット 足には膝から下を覆うように鎧が付けられていた。

俺が鎧を確認し終わると博士がこう言った。

「君に『ロウ』という名前を付けて正解だったよ。顔が狼みたいになったからね。」

博士はどこから取り出したかは分からないが全身が映りそうな鏡を置く。俺は顔を確認する。そこには狼の顔をして鎧をつけた男が立っていた。

「これが俺の鎧か。悪くないな。頼むぞ。相棒。」

「リョウカイ。コチラコソヨロシクオネガイシマス。マスター  
ロウ。」

AIの声も楽しそうに聞こえた。

「鎧もできたことだし『仕事』の時間だね。僕に付いてきて。」

博士はそう言って歩き出した。俺はそのまま走ってついていった。

鑑をまとう男（ロウ）（後書き）

なんか納得いかない。自分に文才がないのが悔しいです。感想  
や指摘がありましたらお願いします。

## 作戦開始（スタート）

「君はこれに乗って待機してもらおうよ。」

博士が指さしたところを見るとそこには真つ黒な大型のヘリが一台待機していた。

「詳しい事は中で説明するよ。」

博士が乗り込んだ後、俺もヘリに乗り込む。中を見ると黒い全身タイツのようなスーツを着た人間が5人いた。

俺が乗り込んだ後、扉が音を立てずに閉まる。

「さて、そろそろ行こっか。」

博士がそう言うとフワリと身体が浮き上がる感覚がする。窓を見ると景色が動いていた。

「博士 これはヘリじゃないのか？ なんも音しないぞ？」

博士は一瞬いたずらが成功した子供みたいな顔で笑い、こう言った。

「これはね。この組織の強襲用ヘリコプター 通称 モスキート。音を一切たてず、姿を一切見せずに目的地上空へ突入し、降下させる。今回みたいな作戦に使われる機体だよ。僕が作ったんだ。」

「そんなことはとりあえず置いて作戦の説明をしよう。君た

ちはビルの崩壊と同時に降下。来た敵を迎撃してもらおう。それなりに戦ったら撤退の合図を出すからどっかの物陰で変身を解除して。変身する時に押したボタンを押して『解除』といえば解除されるから。ロウはとりあえず一旦変身を解除してこれを着て。」

博士は普通のサラリーマンが来ているようなスーツを俺に投げる。

俺はボタンを押し、変身を解除する。

「解除。」

ウオッチに黒と銀の糸が吸い込まれていく。俺はさっきの白衣姿になった。

「この格好でいると多分捕まるな。」

「今更気が付いたのかい？ もうそろそろ作戦開始だ。さっさと着替えたらどう？」

俺はさっさと着替え出す。着替え終わったと同時にブザーが鳴る。

「作戦場所に到着したみたいだね。10秒後に降下するよ。」

「10、9、8、7、6、5」

カウントが進むと同時にドアが開く。風が中に入ってきて暴れ出す。黒いスーツの戦闘員は立ち上がり、開いたドアの前に立つ。

真ん中のスペースが開いていたので俺もそこに進む。

「4、3、2、1」

カウントが進むにつれ足に力が入る。

「O! 降下!!」

博士の声を合図に俺達は外に飛び出す。

派手な爆発音が聞こえた。

俺はウォッチのスイッチを押し、叫ぶ。

「変身!」

先ほど戻った黒と銀の糸が俺を包む。

再び『相棒』を身にまとう。

そして、地面に着陸する。ビルがいきなり崩れた事で人がパニックになっている。降りた時に1人踏んでしまったようで地面とは違った感覚がする。

「サクセン カイシ」

相棒の音が作戦開始を告げた。

作戦開始（スタート）（後書き）

うまく表現で来ている気がしない・・・ 誰かアドバイスください。

## 敵との遭遇（エンカウント）

俺達全員着陸が完了する。この鎧にはレーダーのような機能があるらしく、俺らしい赤い丸がひとつと後ろに赤い丸が5個ある。後ろの丸は味方の戦闘員だろう。

「武装確認。全武装を教えてください。」

「リョウカイ。」

AIがそういつとリストが表示される。

両手にクローとワイヤーアンカー。腰の両サイドにはスモーク弾発射装置。弾は左右に3つずつ 計6個。これしかないのか。あとで博士に追加の武装を頼んでおかないとな。

俺が小さな決意をしたと同時にAiがこういう。

「ミカクニンブツタイ ゴタイセツキン。チュウイ。」

レーダーを見ると北の方からかなりのスピードで『何か』が接近してくるのがわかる。

「総員戦闘準備！」

俺はほぼ脊椎反射でそう叫ぶ。

「クロースタンバイ！」

「リョウカイ。 クロー スタンバイ。」

両方の手のひらから一メートルほどの熊手状の刃が飛び出す。クローが飛び出したのを確認した直後。『何か』が目の前に来た。赤、黄、青、ピンク、緑。 そんな色をした全身タイツの5人組が現れる。 赤色をしたやつが一步前に飛び出してこう叫んだ。

「そこまでだ。 街をこわした罪。 お前らの命で償ってもらおうぞ！」

赤色がそう叫んだことを合図に全員俺達に向かって走り出す。 後ろに居た戦闘員も同時に走りだし、一人一体と組み合うことになった。 俺はとりあえず後ろで様子を見る。 一番先にやられそうな味方を援護するつもりだ。 下手に突っ込むと五対六の乱戦になりややこしい事になるからだ。 そうして傍観を決め込もうとしたとき、AIが最悪な事態を報告する。

「ミカクニンブツタイ。 サラニモウイッタイ。 セツキン。 チユウイ。」

さらにもう一つ灰色の丸がレーダーに表示される。 さっきの5つよりも速く接近してくる。 五人の親玉か。 拳に力が入る。

俺の目の前に5体と同じデザインの全身タイツのような装備をした金色のヤツが現れた。

「貴様がこいつらのリーダーか？ 俺は『セインツ』のリーダー。 コードネーム『ゴールドセインツ』 相手してもらおうぞ！」

金色のヤツ ゴールドセインツとかいうヤツがどこからだしたのか

分からない金色の剣で俺に切りかかってくる。

俺はギリギリのタイミングでク剣をクローで受け止める。

「ただの雑魚ではなさそうだな。スピードを上げるぞ。」

言つと同時にバックステップで距離をとりそのあと再び突っ込んでくる。剣が当たると同時に動き、再び攻撃する。蚊みたいにちよこまかと動いてやりづらい。

とりあえず全ての攻撃を受け止める。『チャンス』が来るまで。

敵との遭遇（エンカウト）（後書き）

うまくかけてない気がする。 どう思いますか？

## 奮戦する狼（ロウ）

どのぐらい戦っていたかわからない。しばらくするとAIが俺が期待していた報告をする。

「セントウイン イチメイ セントウフノウ。 テキ イツタイセツキン。」

このこう着状態が崩れる事。 本当ならこつちが1人倒すことがベストだが一体減ってしまった。 しかし十分だ。

「リーダー。 加勢します！」

緑色をした絶対リーダーにはなれそうもない雰囲気をした奴が合流する。 さてこつちも動くとするか。

「相棒！ スモーク射出！アンカー スタンバイ！」

「リョウカイ スモークシャシュツ。 アンカースタンバイ。」

AIの復唱と同時に視界が白く染まる。 レーダーを頼りに一番近い仲間が戦っている敵の位置を予想する。 そしてそこにアンカーを打ちだす。

腕の下から先端にフックが付いたワイヤーが打ち出される。 それは目標に向かって真っすぐ飛んでいく。 直後、『目標』にささった手ごたえを感じる。

直後、ワイヤーを巻き戻す。 俺の身体は『目標』の方に向かって

飛んでいく。

煙幕が貼られていた場所から飛び出す。俺はワイヤーの先があるはずの部分を見る。『狙い通りの目標』に刺さっている事を確認する。

俺はそのままクローで『目標』を切り裂いた。

煙幕がはれ、金色の奴と緑色の奴が俺が立っているところを確認する。それと同時に2人は叫び声をあげた。

「ブルー！」

俺の足元で転がっている青い奴に向かってそう叫んだ。深く切り裂いたせいかすぐに戦闘に復帰できそうもない傷を負わせたようだ。出ている血の量を見ると早く医者に見せないとまずいかもしれない。

俺は金色と緑の奴がパニックになっている隙に通信回線を開き近くの味方に『指示』を出した。味方は小さく「了解」と返事をする。さて作戦開始だ。

「お前らああああ！」

金色の奴が冷静さを失って突っ込んでくる。正直目で追うのがやっとなスピードだ。

俺と金色の奴の間に戦闘員が割り込む。俺はまだ下を見てぶつぶつ言っている緑色のやつに向かって照準を定める。そして再びアンカーを射出し、切り裂く。

「2人目！ 次はどいつだ！」

俺が雄たけびを上げる。 直後俺に通信が入る。 博士からだ。

「そろそろ撤収の時間だよ。」

「2体倒したんだぞ！？ もうすぐ全滅・・・」

俺の言葉を遮るようにAIの報告が入る。

「ミカクニンブツタイ サラニカクニン。 ゴフンゴにホウイサレマス。」

「僕のセリフ取られちゃったね。 アンカーを上を打ち出してくれ。 ヘリで回収する。」

通信がきれたとたん俺の視界が白く染まる。 だれかがスモーク弾を撃ったようだ。

俺は命令に逆らうわけにもいかず、レーダーに映ったヘリに向かってアンカーを打ちこんだ。

奮戦する狼（ロウ）（後書き）

最初の戦いにしては強引過ぎたかな？ ちょうどいい幕切れって  
いたいのくらいなのだろうか？

## 新武装そして休息（クールダウン）

俺のアンカーはへりに刺さったようで乗り込んだ時、かなり不安定になっていた。

「やっぱりへりで回収するもんじゃないね。別の撤収方法考えとくよ。」

と博士はいい、そのままパソコンのキーボードを叩き始める。

しばらくへりの中はキーボードを叩く音と戦闘員のうめき声しか聞こえなかった。しばらくするとドアが開く。博士はキーボードを叩くことを辞め、扉から外に出る。俺もそれに付いていく。博士は俺が目覚めた部屋に入ると、机に向かい、しばらくキーボードを叩いていた。しばらくすると博士は立ち上がり、叫んだ。

「出来たああああ！」

さっきまでとは全然違う大きな声を上げる。反射的に耳をふさぎたくなるような大声で。

「一体何を作ったんだ？ 博士。」

俺は気になって聞いてみる。しかし博士は笑いながらこう言った。

「出来てからのお楽しみだよ。君の為になるものだから楽しみにしてよ。あとウォッチを貸して。さっきの戦闘中に完成した武器 インストールするから。」

ウォッチの中に武器のデータをインストールすると使用できるようになる。と昔誰かに聞いたような気がする。しかし闇雲にインストールするとすぐに保存領域メモリーがいっぱいになるらしい。だから良い武器をいかに少ない容量でダウンロード出来るようにするかが技術部の腕の見せ所らしい。

博士はそんな作業を鼻歌交じりにやっている。正直知識だけあるせいかみていて不安になる。

また少しの間待っていると博士は今度は叫ばずに伸びをしながらつぶやく。

「やっと終わったー。正直元々戦闘員用に作った武器だけど使いこなせるよね?」

博士は挑戦的な顔で俺の方を見る。

「勿論。やってやるさ。その代わりもつと強力なヤツもたのむぜ?」

「戦闘員用とはいえ、今回のも強力な奴だよ? その言葉後悔させてあげるよ。まあその前に今日はゆっくり休みな。ここの向かいの部屋だから。」

そう言っただけで博士はウォッチとカードキーを投げる。

「別にウォッチでも開けられるけどカードキー使いたかったらそっち使っただけ。」

「りょーかい」

俺は部屋から出て向かいの部屋へ歩く。そしてカードキーを当てるところにウォッチを当て、扉が開いたことを確認すると部屋に入る。部屋の中はクローゼットがひとつとベッド。そしてテレビが置いてあるだけの殺風景な部屋だった

俺はそのままベッドに飛び込み、眠りに着いた。

新武装そして休息（クールダウン）（後書き）

昨日更新サボってすいませんでした。できるだけ毎日更新していきたいと思うので応援よろしく願います。

## 襲撃される組織（チーム）

部屋で寝ていたら突然警報音のようなものと「敵襲を確認。戦闘要員は至急第三ブロックへ集合せよ！」という放送が鳴り響いた。

俺は部屋に入ってそのままベッドに飛び込んだおかげで特に着替える必要もなくそのまま外に出ることが出来る。しかし俺は第三ブロックがどこにあるかわからない。俺はそのままドアを開け、博士の部屋へと向かう。目の前に在って移動が楽でいい。部屋に入ると博士は俺に向かってこう言う。

「ちょうどよかった。今呼びに行こうとしていたところだよ。

今放送で叫んでいるように敵の襲撃だ。数は現在確認されている限りでは15だ。今こっちに残っている戦闘可能なのは20だ。

数はこっちの方が有利だがあくまで戦闘の心得がある程度の人間だ。攻めてきているのはプロ。こっちの戦闘可能な人間の大半は最低でも戻ってくるのに一時間はかかる場所に出撃している。

君には援軍が来るまで耐えるか 可能なら殲滅してくれ。新武装のテストにはちょうどいいだろうからね。」

お願いするように言うが、ここでこの組織が壊滅したら俺の記憶の手掛かりがなくなることと、住む場所がなくなる。実質俺に拒否権はなかった。

「分かった。第三ブロックまでの場所を教えてください。」

「この部屋から出て右へまっすぐ言ったところで戦闘が起こっている。大至急行って欲しいな?」

「了解。 変身！」

俺はウォッチのスイッチを押し、『相棒』を身にまとう。

「ブソウデータ。 キチナイマップ。 インストールカクニン。  
モニターニヒョウジマス。」

AIの声と共に右の方には武器のデータ 左には基地の地図と思われるものが表示される。その地図を見て場所を確認する。 500メートルほど真つすぐ走ったところにあるらしい。 地図の所々は途切れている。 一体この基地はドンぐらい広いんだ？ どうでもいい想像を頭の隅っこに押し込む。 今は戦う時だ。

「レーダー範囲拡大。 どのぐらいまで行ける？」

「ハンケイサンビヤクメートルマデナラダイジヨウブデス。」

「了解。 限界まで拡大してくれ。 行くぞ『相棒』？」

「リョウカイ イキマシヨウ。 マイマスター。 キャクブスラストー テンカイトドウジニ サイダイシュツリヨクデ キドウシマス。」

俺は新武装の脚部スラストーが展開される前に部屋から飛び出す。

部屋から出たと同時に足に子供の頃見たロボットアニメのロボットの足のようなブースターが展開される。

「脚部スラストー イグニッション 点火！」

足元からキュイイイイ という音が聞こえる。 次の瞬間 爆音と共に俺の身体は前に吹き飛んで行った。

## 襲撃される組織（チーム）（後書き）

表現がザックリしていると評価をもらいました。もう少し詳しく書けるように頑張ろうと思います。気が付いたことがあったらぜひどんどんコメント下さい。

## 予想外の事故（トラブル）

直後、頭に強い衝撃を受ける。そして地面にたたきつけられる。その後もあちらこちらに身体をぶつけ、今自分がどこに居るのかすら分からなくなる。

「スラスター 停止！」

スラスターが止まる事でそのまま落下する。俺は痛む身体を抑えつつ通信回線を開く。

「博士！ こりやどーなってるんだ！ 前に進むどころか同じトコぐるぐるまわってただけじゃねえか！」

俺はぶつけたせいとか所々色が変わってたりヒビがはいっていたりする壁を見渡しながらこう言った。

「いや〜 ゴメンゴメン。 まったくテストしてなかったからね。

正直シミュレーションすら終わってないものだったからね。とりあえずいいデータが採れたよ ありがとう。」

正直殺意を覚えた。博士を後でボコボコにしてやるうと思えば第三ブロックへ走って行く頃にした。

500メートル走るのはさすがにきついかと思っていたが案外楽に行けた。昔の俺は陸上の選手でもしていたのだろうか。

そんなことは後だ。とりあえず今は目の前の事に集中だ。 集中。

目の前は広いスペースとなっており、コンテナのようなものが大量に置いてあった。ここは荷物の搬入口か何かだろう。近くには白衣姿でアサルトライフルを撃っている人が居たので話しかける。

「状況は？」

「敵はまだ一体も倒せていない！ 装備はアサルトライフルとグレネードだ。戦闘員の半数は戦闘不能だ。はやく援護行ってくれ！」

男は慌てながらそう言う。事態は思ったよりもまずそうだ。

「クロー スタンバイ！」

「リョウカイ。クロー スタンバイ」

新しい装備はさっきの脚部スラスターと腕に仕込まれたアームバルカン。アームバルカンを使いたいところだがさっきのような事故があつては困る。最悪腕が吹っ飛びかねない。俺は今回もクローとアンカー、スモークで乗り切る事にした。

俺は5メートルほどの大きさのコンテナに飛び乗り上から攻める。

白い防弾着を付けたやつが居る。レーダーでは灰色で表示されている。どうやらこいつは敵らしい。

俺はコンテナからコンテナに飛び移りながら敵めがけて走って行く。ばれないように音をたてないように気を付けながら。

俺は3つほどのコンテナの上を歩き、敵が真下に見えるところまでたどり着く。相手はまだ俺に気が付いていないらしい。これはチャンスだ。

そのまま飛び降り、敵の口を押さえ、背中をクローで突き刺す。  
そして勢いよく引き抜く。あと9体だ。

俺はそう思いながら再びコンテナに飛び乗った。

## 予想外の事故（トラブル）（後書き）

武器のアイデアが出ない・・・ もっと遠距離増やしていいのかな？

だんだん難産になって行ってそろそろルンフォのほうも更新しようかな？ と思っている俺でした。

## 罠を張る狼（ロウ）

「相棒。 敵の位置をレーダーに表示してくれ。」

俺は味方と障害物以外表示されていないレーダーをみてそう言った。

「ホウコク。 ネットゲンセンサー ハンノウナシ。 オソラク テ  
キハ ダンネツシートノウナモノデ カラダヲオオツテイルモノ  
トオモワレマス。 サキホドノウウニ モクシシナイカギリ ホソ  
クフノウデス。」

「了解。 目視すればいいんだな？」

俺はレーダーを頼りに下に降りる。 そして『もし俺が隠れるとし  
たら』という場所に向かって走る。

コンテナの角を右に曲がる。 同時に射撃する音が聞こえた。 鎧  
に何か当たった感覚がしたが対していたくない。

「みい〜つけた」

俺は敵に恐怖を与えるようにホラー映画に出てくる奴のような声を  
出し、撃たれた方向に突っ込んで行く。

「来るな！ 来るなああああ！！」

敵は3人いたらしく うち一人は背中を向けて逃げ出し、後二人は  
俺に向かってアサルトライフルを撃ちまくる。

当たってもちよつと痛い程度なので止まらずに走り続ける。そしてクローで2人の身体を切り裂く。死なない程度に抑えながら。しかし戦闘不能にするため片腕を切り落とす。

「うがああああ！」

「俺の腕がああああ！」

時々だれかが撃っている銃声に負けなくらいの大声を上げながら叫び、のたうちまわる。

落ちていたトランシーバーから声が聞こえた。

「化け物だ！ ライフルが効かない化け物が現れた！ 2人やられたぞ！」

化け物とは俺の事だろう。俺はトランシーバーの音声を送るボタンを押し、2人の悲鳴を聞かせる。しばらくの間聞かせたあとスイッチを離し、トランシーバーを持ってその場から逃げる。

この『餌』に食いついてくれるといいんだが・・・正直敵の装備を見る限りそこまで強いとは思えない。アサルトライフルが効かないならグレネードでも投げてその場から逃げだせばいいものをアサルトライフルをその場で乱射するなんてな。

「大丈夫か！」 「助けに来たぞ！」

さっき1人逃げた方から6人くらいがやってくる。これで指示してる人間を除けば壊滅だ。

予想以上のアホだ。

俺はその6人の命を刈り取るためにコンテナの上に飛び乗り、上から奇襲を仕掛ける。

あと少しで敵にクローを突き刺せる。そんな距離に来た時、あと少しで当たる敵がこう呟いた。

「かかったな？ 変身！」

敵と俺の間に見えない壁があるかのように俺の攻撃が強制的に止められる。そして敵が急に光りだす。

光が収まるとそこにはさつき戦った全身タイトの集団が立っていた。

「我ら『セインツ』 昨日のような不覚は取らん！ 覚悟しろ！ 狼男め！」

目の前に立っていた金色の奴が同じく金びかな双剣を俺に向かって振るった。

畏にかかったのは俺の方が！ 俺は奥歯を強くかみしめた。

罽を張る狼（ロウ）（後書き）

お気に入り件数が5件を超え、PVも10000を超えました。な  
んかすごくプレッシャーを感じる俺でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4844t/>

---

俺、元ヒーローっす。

2011年11月24日23時03分発行